

論 評

生活体験記

新 祐介
Yusuke ATARASHI

生活をしていればいろいろな事を学ぶ機会がある。ここではその学んだ中の一部を紹介したい。ただし、それぞれの制度を詳しく説明したりするのではなく、その制度を自分が学んだ事で考えるようになった事を書く。これから紹介するものに興味が出たら本などでさらに学んでもらえればと思う。

また私はただの数学教員であり、これから書く制度等の専門家ではない。以下の内容に間違いもあるかもしれないし、より良い考えもあるのではないかと思う。もしこれを読んでくれた人が私と話す機会があれば意見をいただければ幸いである。

● 生命保険について

年末調整の時に分かる事だが、生命保険には税金の控除がある。実際に周りの人を見ると、控除されない多額の保険に入っていて保険の証明書を余らせているのをよくみる。実際のどのくらい保険は必要なのだろうか？

○参考

保険会社等の名称	保険等の種別	保険期間又は年金払目	保険等の契約者の氏名	保険金等の受取人		あなたが本年中に支払った保険料等の金額(分配を受けた剰余金等の控除後の金額)	給付の支払者の確認印
				氏名	あなたとの続柄		
一般の生命保険料	XX生命	養老	10年	山川太郎	山川明子 妻	48,000 円	
	合 計					① 48,000 円	
個人年金保険料	OO生命	OO年金	30年	山川太郎	山川太郎 本人	89,000 円	
	年金の支払開始年月日		平成24年 7月 1日		合 計		② 89,000 円
生命保険料控除額	①又は②の金額		控除額の計算式		①一般の生命保険料	②個人年金保険料	計 (①+②)
	25,000円以下		①又は②の金額		①の金額を左の計算式に当てはめて計算した金額(最高50,000円)	②の金額を左の計算式に当てはめて計算した金額(最高50,000円)	(最高100,000円)
	25,001円から50,000円まで		①又は②×1/2+12,500円				
	50,001円から100,000円まで		①又は②×1/4+25,000円				
100,001円以上		一律に50,000円		36,500 円	47,250 円	83,750 円	

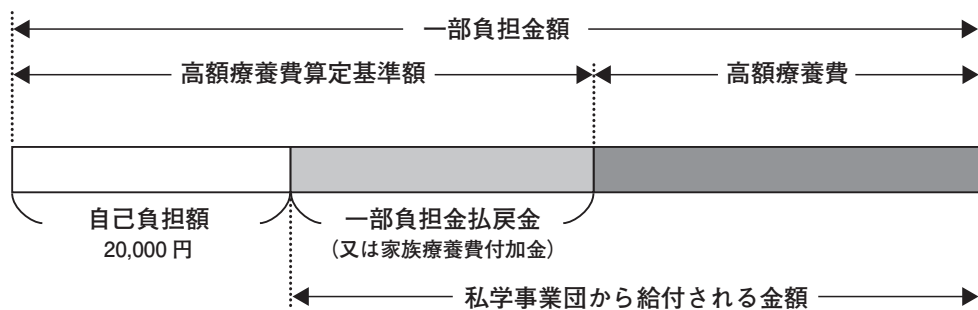
年末調整の用紙にも書いてあるが一般の生命保険料で年間10万円以上は控除の対象にはならない。では年間でこれ以上の保険に入る必要があるのだろうか？以下に自分が見直した保険や学んだ制度について書いていきたい。

〈高額療養費制度〉

ここでは一般的なケース(*)をのせるが、実際に私が一ヶ月に100万円の医療費が掛かったとすると、窓口負担は3割で30万円。そして私は私学の教員なので私学共済から「高額療養制度」で高額療養費と一部負担金払戻金で28万円は返ってくる。結局の所2万円の自己負担である。そのぐらいの貯金はないだろうか？

(*) 上位所得者などの条件で変わる。

○参考



〈死亡保険〉

遺族に残すお金、死亡保険についても簡単に書いておく。こちらでも実際に遺族がいくら必要なのかを考えて保険に入る必要があるだろう。遺族年金や住居の有無でも変わってくるが、あまり大きな金額で保険に入っても相続税(*)が多くなってしまうので注意が必要だ。独身の先輩で生命保険には一切入らずに、個人年金にお金を回している方もいた。賢い選択肢の一つだと思う。

(*) 受取人や契約者などで変わる。

○参考

保険料負担者	被保険者	保険金受取人	かかる税金の種類
夫	夫	妻	相続税
妻	夫	妻	所得税
妻	夫	子供	贈与税

他にもいろいろな制度がある。知らないで高額な医療費等に心配して、多額の保険に入っていないだろうか？また、自分が思い描いていた保険内容と違い、給付金がないというトラブルもよく起きているので注意してほしい。

●住宅ローンについて

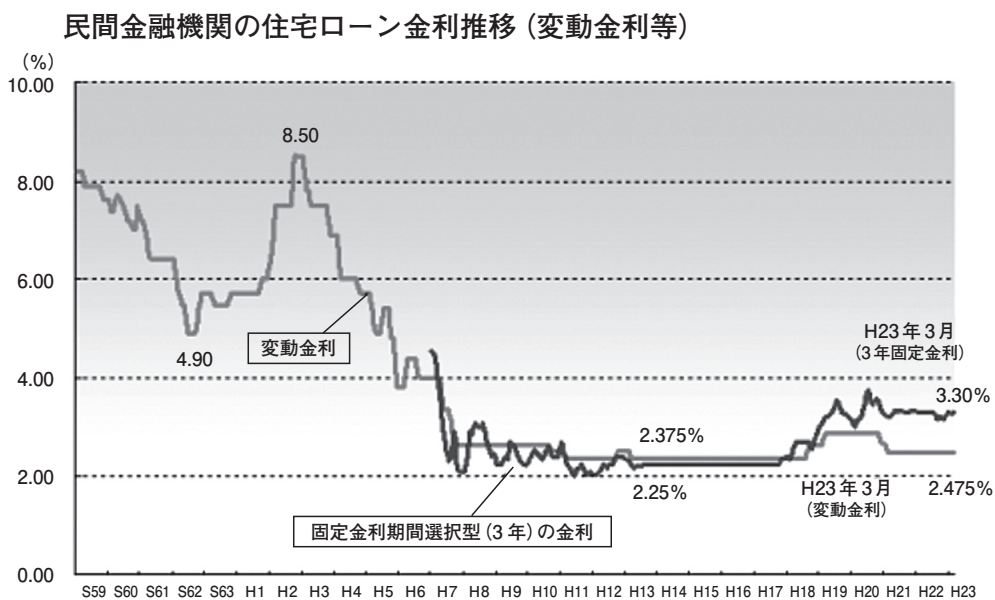
最近、周りで家を買う者が多く、様々な住宅ローンの苦労話を聞く。ここでは金利について学んできたことを書きたい。

では固定金利、変動金利のそれぞれのメリット、デメリットを実際の数値で例を挙げてみる。

*ここでは手数料や団信料などのお金は計算に入れていない。

〈変動金利〉

○参考



注. 主要都市銀行における金利を掲載。なお、変動金利は昭和59年以降、固定金利期間選択型（3年）の金利は平成7年以降のデータを掲載。

上記グラフからもわかるように、今はだいぶ低い金利になっている。変動金利は基本的には固定金利より低く設定されているから、当初の住宅ローンの支払いが一番安く抑えられる。実際に3000万円を借りたとして今の変動金利1%程度(*)で借りるといくら払うのか計算してみる。

(*) 優遇金利を含めて計算された金利

例1

借入金	3000万円	金利	1%
月々	84685円	総返済額	約3556万円

例のように、約550万円の利子を払う計算になる。

しかし、これは35年間の金利が1%で続いたときの金額である。実際にはグラフのように金利は変動する。バブル時期であった8.5%は特別としても、1年で0.5~1%ぐらいは普通に上がる。最悪のケースとして4~5%ぐらいは考えていてもよいのではないかと思う。今度は当初1%だった金利が5年後には5%まで上がったと考えて計算してみる。

例2

借入金	3000万円	金利	1% (最初5年) 5% (残期間)
月々	84685円 (最初5年)	125700円 (残期間)	
総支払額	約5033万円		

5年後には月々の支払いで4万円上がり、総支払額は1500万円ほど多く払う事になる。借入金3000万円以上なら更に差は広がるだろう。また、金利が5%以上にならない保障はどこにもない。

まとめるとメリットは今の金利が続けば、一番総支払額が安く借りられる可能性がある事だろう。デメリットは金利が読めないののでいくら払うか分からない事、しかも急激に金利が上がった場合は未払い利息が発生し借入期間まで延長されることもある。

もちろん金利が上がる前に固定金利に変えてしまえば、この問題は解消される。しかしその金利を読む事が一番大変であり、私は厳しいと考える。

〈固定金利〉

短~長期間の固定金利があるが今回は35年間全て支払い期間を固定するもので考える。全期間固定金利で2.4%(*)として先程の変動金利のときと同じく3000万円を借りる計算をしてみる。

(*) 楽天、2010年12月のフラット35の金利

例

借入金	3000万円	金利	2.4%
月々	105647円	総返済額	約4437万円

変動金利の「例1」の場合より月々の支払いで2万円上がり、総支払額は900万円ほど多くなった。やはりデメリットは変動金利の理想よりは支払いが多くなることだろう。どんな時期

だろうと基本的には変動金利の方が固定金利より低くなっている。

メリットは必ずこの期間で払い終わり、経済情勢などに影響されないことだ。

〈まとめ〉

変動金利と固定金利での総支払額を確認して、安心料としてその差額を払ってもよいかどうかで判断する。私は短い期間（2～5年）の固定は中途半端であると考え、ただし10年固定は各銀行が金利を競い比較的安く設定されている事が多いので考えにいれてもよいのではないかと思う。

住宅ローンは銀行側にとっては美味しい商売である。私たちは銀行には金利、国には税金（固定資産税など）を払う事になるので、良くわからないまま、流行や見栄で家を買うのはやめた方がよいだろう。

私は職場に通える実家が親から相続できるのなら、家を買う事はお勧めしない。

以上、今回は保険と住宅について学んだ事を書いてみた。自分の話になるが2年前に母親が交通事故に遭い、この2年間は過失割合や慰謝料について学び母の代わりに示談交渉をしてきたが、やはり知らない事も多く苦勞する事になった。大半の人は何も知らないで生きていくことが可能だろう。しかし、知らなければ苦勞する事や痛い目を見る事は数多く存在する。自分に関わる社会の制度を学びながら生きていく事は、私は「生きる力」の一つだと考える。